

それから間もなく、北風の吹き荒れる頃、八路軍が突然やって来ました。そして自分達が入ることになったので、立ちのくようにと言われ、いや応なしの言いわたしでした。持てる物は何回かに分けて公会堂まで運び、寒さをしのぐことだけできたのは幸せでした。

私の主人は、大倉組の会計係でしたが、昭和二十一年五月、佐世保港に着くまで消息不明でしたが、昭和二十三年、シベリアの引揚げが始まって間もなく、小さな箱に入って帰って来ました。

さようなら吾亦紅

福岡県 吉岡百合

昭和九年十一月、亡夫立花達雄と結婚式を済ませ、満州国奉天市曙町に居を構えました。昭和十三年、奉天の大倉組よりソ連領が目の前に見えるような大城子という所へ行きました。日本の兵隊さんの町であり、兵隊さんの家族が大勢で、たいへん活気に満ちており

ました。

大城子より小城子、綏芬河と、転々と移り、主人は忙しい土木工事に追われておりましたが、昭和二十年二月、二人目の子供をみごもっていた私を気づかかって、新京の叔母のいる所に家を見つけて、転居させられました。と同時に、叔母から、達雄さんが応召されたと告げられました。お腹の子供の名前も男子なら雄一郎、女子なら順子、と叔母に命名書も預けてありました。主人を新京駅に送ったのが最後の別れになるうとは。病院で無事女の子を出産し、産後の日だちも順調に家に帰りました。産まれたばかりの赤ん坊を抱えて、どうして暮らすのかと思うと目の前は真つ暗くなるばかりでしたが、叔母達の情が今も嬉しく、有難くてなりません。両親の愛情を知らぬ私は、叔母夫婦を自分の両親のように思い「したって」おりましたので、主人のいない日々を淋しい思いもせずに過ごすことができました。

八月七日、新京電電公社につとめていた、叔父が夜明け近くに帰ってきました。叔母に「軍のようすがお

かしい」と言い、トランクに下着や冬仕度、それに、預金帳を渡しています。「あなたも、たいせつな物だけをまとめて、リュックに入れて用意して置きなさい、いつでも出て行ける用意をね」と。

叔母もそれを最後に叔父との別れとなってしまうした。翌日の朝、昭和二十年八月八日、叔父は必要な品を持つと、朝食も取らずに私の顔をじーっと見て、うなづくこと、玄関から消えて行きました。「翌九日、叔父から電話があり、ソ連機が国境を越えてきたと連絡あり、気をつけろよ」と言い残して電話が切れました。それが本当に最後の声でした。それから、何をどうしたか、毎日が、恐ろしさと赤ん坊の衣類、上の子の身のまわり、主人の安否、これからどうなるのかと、行き来を案ずる毎日が続きました。主人からの便りはとだえたままでした。

八月の十三日、隣組の組長さんから「現在、ソ連戦車が南満方面に向けて前進中、婦女子は外出できませせん。男子は盲目者、不具者以外は、ソ連戦車に体あたるの覚悟でいてください。」との連絡がありました。

昭和二十年八月十五日正午、ガーガージーといいうラジオから流れる声を聞きながら、叔母と二人ポカーンとしておりました。ハツとして赤ん坊をかかえ、うえの子の手をしっかりと握り、「父さんが帰ってくるのよ」と叫び、声を上げ喜んだ私でした。それから二日間、私は全く生き生きとしていたそうです。叔母も叔父が帰ってくるものと単純に思いこんでおりました。

翌朝まだ夜も明けやらぬ五時近く、ごうごうと大波のような、うなり声が押し寄せてくるのに目がさめました。「赤ん坊を、おんぶ早く早く」とせき立てられ、身仕度のモンベのひもをしっかりと、しめなおし、赤ん坊を背にしました。二十七歳の年でした。

それから公会堂へ、学校の講堂へ、転々と移動しました。お隣りの泉さんの若奥さんは、移動する途中、満人の暴民が蹴飛ばし、抱いていた赤ちゃんを落とされ、赤ちゃんは、後から来た、暴民にふみつけられ、死にました。奥さんと私は赤ちゃんを泣く泣く校庭の隅のポプラの根元へ埋めてきました。傍を離れようと

しない奥さんを無理に引つ張って、次の移動場所へ行きました。赤ん坊を背負い、子供の手を引いての逃走に、身体は綿のようになってしまいました。

翌年五月末引揚げの通知を貰いました。引き揚げるため、泉さんと二人で、埋めた所へ行きましたが、お骨はなく、赤い綿入れのチャンチャンコが泥にまみれて、散らばっていました。校庭の荒地に吾亦紅の赤紫の花が風にゆれてひとしお悲しさをさそう日でした。

昭和二十一年五月三十日、佐世保港着。

地獄の曠野

福岡県 大 洲 チヒロ

今頃、満州開拓などと申し上げても、当事者以外の人には、百科辞典でも調べないとご理解できないと思います。

日本の敗戦により愛児を失い、命からがら悲しくつらかった満州引揚げの傷跡がいつの間にか忘却の彼方

へと消え去るを愁い、真実の姿の一端でも伝えたい、せつない願いをこめてペンをとることにしました。

昭和の初期、日本農民を百万戸、五百万人を満州大陸に開拓者として送り出す、移民運動がありました。それが終戦の時には、二十七万人の開拓者を送り出していたが、敗戦で死亡八万人を越した。開拓民が如何に悪条件におかれたか、世界史に類のない農民哀史であると、吉崎千秋氏（元拓務省技師、開拓団指導員）が述べておられる。

私は、女学校卒業後間もなく、満州大陸に渡った開拓花嫁の一人ですが、引揚げ後、育児、家事、農業の多忙な毎日の中で、引揚メモを、主人が病床に臥した機会に校正して下さいました。昭和五十三年、孫の節句の日です。

私達の開拓地は、吉林省舒蘭県の開原城子河で、満州の京とも言われた吉林に近い開拓地でありました。

主人は、昭和十九年一月に平川明さんと一緒に召集になって、遠いフィリピンの戦野におりました。その後、次々と召集され、私達の部落は、十一戸で、子供